
真剣で最強は恋してる

ブラッディクロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で最強は恋してる

【Nコード】

N0241Y

【作者名】

ブラッディクロス

【あらすじ】

闇との戦いで人生に幕を下ろした風林寺 隼人。実はこれは神のミスでお詫びに隼人は別の世界で生きることになる。その世界で無敵超人が大暴れ！！

ブログ前篇（前書き）

この小説は作者の初投稿作品に加えて作者のやりたい放題ですので
気に入らない人はブラウザバックしてください、それでもいいとい
う方はどうぞご覧ください

ブログ前篇

隼人 side

僕は風林寺 隼人じゃ。

最近なんじゃがよくわからんがいやな予感がするんじゃ。

???「おらああああ」

隼人「おっとと、いきなりじゃのうお主」

今まさに達人級に不意打ちされとるんじゃがな。

隼人「ぬりやああああ」

???「ぐああああ」

毎度毎度しつこいのう闇の連中。

闇「ぐっ…くそ…おいあいつを連れてこい…!!」

人質か？卑怯な連中じゃな。

闇「動くんじゃねえぞ…!!…無敵超人…!!…こいつがどうなって
もいいのか？」

兼一「くそ…!!離せ…!!」

美羽「……………」

「……………まさか兼ちゃんと美羽が捕まったのか…美羽は気絶させられとるのか。」

隼人「…二人をどうする気じゃ…お主らこんなことをしてただで済むと思うとるのか?」

闇「へっ今更どうなろうと知ったことじゃねえ無敵超人の首さえ取れりゃそれでいいんだよ!…!」

まさかここまで腐ったやつがいるとはのう。

そこで僕はほんの少し動揺してしまった。

闇「…!いまだかかれえ!…!…!」

!!いかん。

闇の武器組「……………おおおおおおお!…!…!…!」
「……………」

しまった!!これは間に合わんのう。

ドス!!ザシュウ!!ドスドスドス

闇「どうだやったか?」

せめてあの二人だけでも助けねば。

隼人「ぬりやああああああああ」

闇達「「「「ぐわああああああああ」」」」

兼一「長老！！！」

おお、兼ちゃん達は無事じゃったか。

兼一「長老！！！！しっかりしてください！！！」

隼人「おお……………兼ちゃん…すまんこんなことに巻き込んでしまった」

なるほど人間は死ぬときなんとなくわかるらしいが本当みたいじゃないのう。

隼人「すまんが…梁山泊の……………みんなにすまんと……………伝えてくれ」

兼一「そんな……………長老が生きて自分で伝えてくださいよ！！！！！！」

兼ちゃん男が簡単に涙を流すんじゃない。

隼人「すまんの……………僕は……………もう……………長くない……………だから兼ちゃん……………代わりに伝えてくれ……………」

隼人「それと美羽を……………守って……………やって……………く……………れ……………」

そして僕の人生は終わった。

兼一 side

兼一「長老？しっかりしてください！！！！返事をしてください！！！！」

そんな長老が死ぬなんて嘘だ。

兼一「嘘だ………嘘だ――――」

続く

ブログ前篇（後書き）

どうも初投稿なのでどんな感じかわかりませんが感想をいただけたら嬉しいです。

次話からも頑張ります

ブログ後編（前書き）

誤字脱字があればすいません

プロローグ後編

隼人 side

隼人「ぬう？ここはどこじゃ？」

周りを見れば真っ白の空間。

上も下も右も左も真っ白の空間。

「……あの……すみません……」

隼人「ひょ？なんじゃ？」

後ろから声かけられたから見たら兼ちゃんの妹と同じくらいの女の子がいた。

儼に気配を消しながら近づけるとはなかなかの手練れじゃ。

「……あの……ほんとにすみませんでした！！！！！！！！！！」

隼人「……？どういうことじゃ？」

「……？「実は私は人間からは神と呼ばれる存在なんです」

なるほどだから神々しい存在感があるのか。

神「それで私達は個人の人生の書類を見てる時に部下が……その……あなたの書類にコーヒーをこぼしてしまい残りの寿命のところに

かかってしまったときにあなたの死が決まってしまう本来死ぬはずではないあなたは死んでしまったんです」

隼人「なるほど……それで僕はどうなるんじや？」

神「え？あの…怒らないんですか？」

神が少しおびえながら聞いてきた。

隼人「怒るも何もミスをしたなら次はせぬように気を付ければいいんじやよ」

そう言うとき神は突然泣き出した。

隼人「……！どうしたんじや？お腹でも痛くなったか？」

神「ヒック……いえ、違うんです…グス……ただそんな優しい人を間違えて殺してしまったのが申し訳なくて、っとお腹痛くて泣くって私子供じゃないです……！」

隼人「おお、すまんすまん、見た目が子供じゃから老人はそう言うてしまったんじやよ」

神「むう………まあそれは自分でもわかってますからいいです」

神「それであなたを殺してしまったお詫びに別の世界で転生してもらおうと思ってここに来てもらいました」

隼人「別の世界？」

神「はい、そうですねと言っても大抵は人間が娯楽で作った世界を元にしてるんですが」

隼人「その儂が行く世界も娯楽を元にした世界なのか？」

神「そうですねゲームの「真剣で私に恋しなさい」というものです。といっても武術に没頭していたあなたは知らないとおもいますけど」

隼人「そこはどんな世界なんじゃ？」

神「普通ですよ、まあ女性がすごく強い世界ですが」

隼人「ほう？おもしろそうじゃのう」

隼人「それで儂はその世界で何をしたらいいんじゃない？」

神「普通に人生を楽しむだけですよ？」

普通に……

神「別に強い人と闘ったりしてもいいですよ。あなたのやりたいようにやってください」

神「その世界の話はこれでもいいとして、あなたにはお詫びとして三つ願いを聞きます」

隼人「願いのう……」

願いかどうしようかのう……

神「デフォルトで身体能力や死ぬ前の記憶などはそのままですから」
なんと！！おまけもあるのか。

隼人「なら一つ目じゃが「身体能力の向上及び成長の限界突破」」

神「すでに身体能力はその世界の最強を超えてるんですが……まあいいですよ。あ、それと向こうの世界では一般的に「気」というものがあるのでそれも自由自在に操れるようにして限界突破もしてきますね」

この神は太っ腹じゃのう

隼人「それはありがたい二つ目は「自分にのみかかる重力制御装置」をくれんかのう、日常でも鍛えられるからのう」

神「わかりましたリストバンド型にしておきますね、それと、重力は際限なくかかるようにしておきます、もちろん周りには影響はでません」

これでいいかのう

隼人「最後はお主の知っておる娯楽の武術や技などの記憶をくれんかのう」

神「それもおまけでいいですよ、あとここでその技など修行していただくさい、数が多いので時間がかかりますがここは時間の概念がないのでいくら居ても大丈夫です」

やはりこの神は太っ腹じゃのう。

隼人「なら、「どんな動物でも懐かれるさらに会話も可能」こんなんでどうじゃ？」

神「ええ、大丈夫ですよ。」

すると神は目を閉じて何かブツブツ言い始めた。

神「これで願いは叶えました、それと年齢は18で娯楽で言う物語の開始です、容姿の方はあなたの昔の18歳のときのままで、それと筋肉ムキムキだとモテないかもしれませんがどんなに鍛えても細マツチヨにしておきました。」

たしかに頭に全然知らん武術の知識や技の使い方が入ってきた、てかおまけが多いのう、まあ助かってるからいいんじゃないが。

やっぱりこの神は太っ腹じゃのう。

神「まあ、あなたのように優しい人を殺してしまったお詫びですよ」

隼人「むう？今心を読んだのか？」

神「まあこれでも神ですからね」

見た目は子供じゃがな

隼人「とりあえずここで修行がしたいんじゃないが、どこですればいいんじゃない？」

神「あ、後ろの扉に入ってくればいいです。それと中に入った後に修行したい人や物を思い浮かべれば出てきますから。出たいと思えばその扉が出てきますからそれをくぐればここに戻ってこれます」

後ろを見たら真っ白の扉があった。

隼人「それはありがたい、では、行ってくるわい」

そして僕は扉を開けて中に入った。

隼人 side end

神 side

神「やっぱり悪いことしちゃったかな、帰ってきたらまた謝つとかないかね」

神「修行頑張ってくださいね、風林寺 隼人さん」

神 side end

続く……

プロローグ後編（後書き）

やっと書けました、次は遂に無敵超人がまじこいの世界に転生する
と思います。

次話も執筆中です

一話 無敵超人転生（赤ん坊になる）（前書き）

すいません技などは作者が個人的に好きなのが多いのでそこは勘弁してください

一話 無敵超人転生（赤ん坊になる）

隼人 side

隼人「ここでの修行は楽しかったのう」

ここには100年くらい居たかのといっても別のことを教わったり宴をしてたがの。

隼人「そろそろここを出て新しい世界に行こうかのう」

そう思ったら目の前に扉が現れた。

隼人「ひょー！びっくりしたわい、まったく老人の心臓に悪いわい」

そして扉をくぐるとあの神様がいた。

神「もう修行は良いんですか？」

隼人「もう十分じゃわい、というか十分すぎるくらいじゃがな」

神「そうですか、ではもう転生してもいいですか？」

隼人「ああ、大丈夫じゃ」

神「あなたが転生すれば私たちは何もできませんからその世界で新しい恋人でもつくって楽しい人生をお過ごしください、あ、あなたの運氣も上げておきましたこれは良いことが起こりやすいだけですので厄介事には巻き込まれると思いますから気を付けてくださいね」

厄介事がまあいつも通りにノリでなんとかなるじゃろ。

隼人「わかった」

神「では、その光の穴を通ってください、その先で新しい人生が待ってますから」

隼人「わざわざ面倒かけてすまんのう」

神「いえ、こちらこそ本当に申し訳ございませんでした。本当はもっとお詫びをしたかったんですが元々あなたは最強ですので存在が強すぎて干渉できないのでそれぐらいしかできなかったんです」

隼人「これだけしてくれれば十分じゃよ、そんなに気にせんでもよい」

隼人「それじゃあ、そろそろ行くわい。儂が死んだときにまたお主に会えるのを楽しみしておるわ、では、またの」

そして儂は光の穴に入って消えた。

隼人 side end

神 side

神「ほんとに申し訳ないことをしてしまったなあ、もし、彼が元の世界で私たちのミスがなく決められたときに死んでいたら、神にもなれたほどの魂の強さがあつたからなあ」

神は光の穴があつた方向に向かつてそんなことを言っていたが、それは神以外は知らない事実。

神sideend

隼人side

ぬう！？光の穴に入っていきなり真っ暗になったのに今度は急になるくなったの

隼人「オギャー！！オギャー！！」（転生とやらは成功したから僕は赤ん坊になつとるのかの？）」

？？？「見てあなた元気な男の子よ」

？？？「確かにこの子は俺にどことなく似てる感じがするなあ」

この二人が僕の親かの？

母親「あなたの名前は隼人「風林寺 隼人」よ」

なんとこの世界でも同じ名前なのか、これも神がやってくれたのかのう

父親「一応名前を言っておくか、お前の父親の「風林寺 碎牙」だぞ」

母親「私は「風林寺 静羽」よ、よろしくね、私たちの隼人？」

なんと名前が息子夫婦と一緒に……まあ大丈夫じゃろ

隼人 s i d e e n d

こうして無敵超人の新たな人生が始まる

続く……

一話 無敵超人転生（赤ん坊になる）（後書き）

すいません、ヒロインは決定してるんですがどうやって主人公に惚れるか惚れさせるかが決定してないんでそこが時間がかかって遅くなるかもしれません、申し訳ありません。

主人公設定（ネタバレあり）随時更新します（前書き）

一応ネタバレがあります、あと気でこんなことができるわけないと思っけていても無敵超人が普通に攻撃したら誰であろうと死にますから妥協してください、申し訳ございません。

主人公設定（ネタバレあり）随時更新します

名前：風林寺 隼人

身長：原作開始時 185cm 小学生時 154cm

体重：原作開始時 89kg（筋肉があるのでかなり重い）

小学生時 43kg

職業：原作開始時 川神学園3年C組

年齢：原作開始時 18歳 小学生 11歳

性別：男

性格：穏やかだが基本的には戦闘は避ける。

真剣勝負では相手に合わせて殺さない程度には本気を出す、しかし外道には一切容赦しない。

家庭：父、母健在

好きな食べ物：肉

嫌いな食べ物：毒があるもの（致死量の毒でも平気だが体が少しピリピリするから）

武器：拳

異名：裏の世界では前世と同じく「無敵超人」と恐れられている

容姿

顔：上の中

髪：黒でまじこいのキャップより少し長い

瞳：黒

体型：神のおまけのおかげで筋肉はあるが見た目は細マッチョ

小学生時

ステータス

筋力：EX++(?)

脚力：SSS++(?)

耐久力：EX+(?)

気力：EX(?)

敏捷：EX++(?)

幸運：AA+

通常時

筋力：EX

脚力：SSS

耐久力：SSS+++

気力：SSS++

敏捷：EX

(○)のなかは重力制御装置を外した時のステータス、だがランクが表示
できない。ちなみに

本気を出してこのステータスなので普段は力を

抑えているため2ランクダウンする。

原作開始時

筋力：測定不能 (例) 本気で地面を殴ると隕石が落ちたとき

並みの衝撃が出せる

脚力：EX+++++ (例) 普通に蹴ってもワンピースの嵐脚

以上のものが出せる

耐久力：測定不能 (例) 川神流禁じ手富士砕きを10発以上食

らっても平気

気力：測定不能 (例) 全力で気を解放しても一か月は余裕で

解放し続けれる

敏捷：測定不能 (例) 本気で移動すると光速並みの速度を出

せる

幸運：A A +

ちなみに本気でやれば武道四天王と川神鉄心が同時に襲ってきても

楽に返り討ちにできる

ちなみに川神 百代のステータス

筋力：S S +

脚力：S +

耐久力：E X （瞬間回復あり）

気力：S S

敏捷：S S + +

幸運：B +

川神 鉄心のステータス

筋力：S S + +

脚力：S S + +

耐久力：S S + + +

気力：S S S +

敏捷：S + + +

幸運：A -

備考

顔立ちは10人中9人は振り返るほどのイケメン、しかし告白されても大抵は断って

いるため彼女はいない。

精神年齢が老人のため困っている人を見ると放っておけないがお節介はほどほどにしている。

どんな状況に陥っても前世のこともあるため冷静に対処できる、そして相手の目を見る

と大体のことがわかってしまうから口には出さないが隠していることを見抜いてる。

神への願い

身体能力の強化、成長の限界突破

ちなみにこれがなくともすでにチートの無敵超人なのでチートを超えるチートになっている、

ちなみにこれにしたのは新しい世界に行くなら以前の自分を超えることと新しい武術を学ぶため。

自分用の重力制御装置

これは、無意識のうちに体が衰えないようにするためと無意識下での鍛練用である。

どんな動物でも懐かれるさらに会話も可能

これは、普通の人間は動物と会話などできないから動物が見た情報を手に入れる

ためと隼人が動物が好きだからどうせなら会話もしてみたいという願い。

幸運

神のおまけで付けてもらったもの、これは身の回りで起こるいいことが多くなる。

例えば：宝くじが当たったり、福引でいいのが出たり、など

しかし、神が言っていた通りほぼ確実に厄介事に巻き込まれる、

ちなみに厄介事に巻き込まれるのは決まっているので幸運は一切関係ない。

攻撃時は隼人は必ず腕を気で纏って攻撃する、この攻撃法は隼人しか使えないなぜならこれは

相手を殺してしまわないようにある程度怪我はするが致命傷はこの気が致命傷にはしないよう

している。誰にもばれない程度には常に纏っている。

あと神の世界で岬越寺 秋雨の医療技術を教えてもらったりしていて死んでない限りは氣と教えて

もらった医療技術で治療する。

小学校を卒業した後は宝くじで儲けた金で世界道場破り&ぶらり旅に3年間行くため日本を離れる、 その間にすさまじいほどの交流関係ができてしまう。

中学は行っていないが知識はあるため川神学園の入試は平気。

主人公設定（ネタバレあり） 随時更新します（後書き）

いろいろおかしなところもありますが許してください、おそらくですが使う技は本当に自分が好きな技ばかりなので許してください。
たまにネタ技も入ります
次話も頑張ります。

二話 小学生になり友達になる（前書き）

いきなり時間が飛びます

二話 小学生になり友達になる

隼人 side

僕は今公園で一休みしとるところじゃ。

隼人「ふう、やっぱり学校は面倒だな」

二回目の学校だからなあ。

小学校5年生になりました。

いきなり時間が飛んだ？気にすんな、俺は気にしない、ていうかしたくない。

なんでかって？赤ん坊のときのことがあったからだよ……察してくれ。

まあそれは置いて、神に頼んだ重力制御装置（以後リストバンドで表記します）は3歳の誕生日の時にいつの間にか付けられた。今は勝手に重くなるようにしとるから設定はせんでも大丈夫。

身体能力は子供の体ではいつも通りにはいかないから少し鍛練でもしないといけんかのう。

ん？なぜか視線を感じるの？

???「ジーーーーー」

なんか、黒髪の女の子にすごい見られてる。

隼人「どうした？そんなにこっちを見て」

すると、女の子はびっくりしたのか物陰に隠れてしまった。

隼人「しかたないのう…」

僕は立ち上がり黒髪の女の子の方に行き

隼人「何か言いたいこともあるのか？」

???「!!!!!!…あ、あの…ね…えっと」

!!なるほどそういうことが

隼人「ん、そうだ俺と友達になつてくれないか？」

???「!!!!!!えっ?いい・の?」

やはりそうか

隼人「ああ、俺も友達がいらないんだよ、だから俺と友達になつてくれないか？」

???「うん・・・グスツ・・・うん・うん」

???「僕なんかが友達でもいいの？」

隼人「何言つてんだ、お前も友達になりたいから見てたんだろ、い

いに決まってんだろ」

???「うわ~~~~んありがと~~~~グスッ・・・友達に・・・なっ
てくれて・ありがとう」

隼人「今までつらかったんだろ、胸貸してやるから存分に泣けよ…」

そして彼女は胸に飛び込んできて泣いている……

〜10分後〜

隼人「どうだ？泣いてすっきりしたか？」

???「うん、ありがとう、でもごめんね、服汚しちゃって」

隼人「いや大丈夫だよ、気にしないでいいよ」

隼人「それより名前を聞いてなかったな俺は「風林寺 隼人」とい
うんだ」

???「私は「前山 小雪」よろしく、それと、友達になってくれ
てありがとう」

よく見ればこの子は隠しているが怪我をしているの……まさか……

隼人「なあ小雪？」

小雪「何？」

隼人「その怪我どうしたんだ？」

小雪「！！！！なんで怪我してるってわかったの？」

やはりか…学校のいじめでこれほどの怪我はありえん、なら親からの虐待しかないか……

隼人「小雪正直に答えてくれ、今児童相談所に電話すれば親は捕まるが別の親のところでは平和に暮らせる、がこのまま放っておけばいい小雪を手にかけるかわからん、だが決めるのは小雪だ、すまんが出会ったばかりでこんなことを言って」

小雪「僕は………」

僕はどちらの選択でも受け入れる、もし小雪に危機が迫ればわかるからの。

小雪「僕はお母さんと暮らしたい………」

隼人「そうか……ほんとに危なくなったらいつでも頼ってくれていいからな」

そう言いながら僕は小雪の頭を撫でた。

小雪「うん……ありがとう」

隼人「さて、こんな辛気臭い感じは終わり、何して遊ぶ？」

小雪「うえ？うゝん……友達がいなかったから何して遊んだらいいかわからないや」

そういえば、神の願いの動物との会話があったな……使つか

ピーーーーーー

指笛を吹くと草むらがガサガサと動いた、

そして、野良猫が出てきた

本当にできた

猫「ニャー？（読んだ？）」

おおーほんとに声がきこえるわい

小雪「わあびつくりした、いきなり猫ちゃん出てきた」

隼人「実はこの子と一緒に遊んでほしいんじゃが」

猫「ニャー（いいよー）」

そして小雪と猫は追いかけてこをしたりして遊んでいる。

小雪「ねーハヤトー一緒に遊ぼう」

隼人「ああ、今いくよ」

そして夕方まで二人と一匹で遊んだ。

小雪「じゃあまたねー」

隼人「ああ、またな」

猫「ニヤニヤー（またな）」

隼人「ありがとうな、わがママを聞いてもらって」

猫「ニヤニヤーニヤ（僕も楽しかったからいいよ）」

猫「ニヤニヤー（また呼べば駆けつけるから、気軽に呼んでいいよ）」

隼人「ああ、すまないな助かるよ」

そして猫も去って行った。

隼人「さて、小雪の親には注意しておかねばな」

そして隼人も家に帰って行った。

隼人 s i d e e n d

続く……

二話 小学生になり友達になる（後書き）

すみません小雪の旧姓がわからないので勝手に決めました、間違えてたらすみません、次話は小雪と共にあの二人組に会うと思います。

三話 無敵超人と小雪に友が増える（前書き）

感想に若者言葉と混ざってる意見があつたんですが一応若者言葉でこれからは統一していきます。

一応隼人は風間ファミリーとは縁が無く原作開始時に会うというようにします

三話 無敵超人と小雪に友が増える

隼人 side

小雪「ハヤト〜こっちだよ〜」

小雪と会ってから毎日のように一緒に遊んでいた

いつもの公園に行くとそこにはどこか暗い雰囲気少年が二人ベンチに座っていた。

隼人「なにかあったのかな？」

すると

小雪「ねえ〜どうしたの〜」

小雪が二人組に話しかけていた。

「???」「誰ですか?あなた達は」

すると少し肌の黒い男の子が言ってきた。

小雪「僕は小雪、こっちはハヤト」

ハヤト「風林寺 隼人だ、よろしく」

「???」「僕は葵 冬馬です、こちらは…」

???「井上 準だ」

小雪「よろしくね、準、冬馬」

一応二人に話を聞いておくか。

重い話になるかもな一応小雪にはきついかもしれないからな

ピーーーーーー

冬馬「何をしているんですか？」

隼人「まあ見ていたらわかるよ」

ガサガサ

そしてあの猫が出てくる

猫「ニャー（読んだ？）」

すると、二人はびっくりした表情をしている。

隼人「すまんが小雪と一緒に遊んでくれんか？」

猫「ニャ（わかった）」

そして猫は小雪の方に向かって走っていき一緒に遊び始める。

そろそろ聞くかの

隼人「何かあったのか？」

すると二人の肩がビクツと少し動いた

隼人「どこか暗い雰囲気だったからな、何か合ったのかと思ってな」

すると冬馬が口にしたのは驚愕の事実だった

冬馬「私の家は葵紋病院というところでしてね、最近親の様子がどこかおかしかったので後を追ってみると入って行った部屋の中を覗いたんです、そこには病院の不正が行われていた資料があったのですよ」

隼「それで若と俺でどうしようか悩んでいたらあんたらが来たんだ」

なるほど親の仕事の不正を見つけたのか、それは暗い雰囲気にもなるな。

冬馬「父は患者のみんなからも信頼されている大人だった、だが、それが裏ではあんな汚いことをしていたなんて、しかも私にもその、親の血が流れているんですよ」

隼人「で？お主はどうしたいんじゃない？」

冬馬「わからない、私は何をしたいのか、今まで信じていたものがなくなっただけがしたいのかも」

隼人「俺が言えるのはお前はお前だ、親は親だ、だから親にあれこれ言われたのをやるんじゃないかってお前が自分で決めたことをやればいい」

冬馬「自分で、決めたこと」

隼人「そうだ俺からはそれくらいしか言えることはないからな、別に親が不正をしているからって俺はお前達のことを責めることはしねえよ」

すると二人は少しの間話し合って何かをすることを決めた顔をしていた

冬馬「ありがとうございます、私たちはこのことを警察の人に話してみます」

準「あんたのおかげで決めることができたぜ、ありがとう」

隼人「何気にしないでいい、結局決めたのはおまえらなんだ」

すると小雪が呼んできた

小雪「ねえ〜ハヤト〜トーマ〜ジュン〜一緒に遊ぼうよ〜」

隼人「おうわかった〜ほら行こうぜ二人とも」

冬馬・準「いいんですか？（いいのか？）」

隼人「小雪が呼んでんだ、いいと思ったから呼んだろ」

小雪「は〜や〜く〜あ〜そ〜ぼ〜」

隼人「おっと小雪が怒り出しそうだな、さっさと行こうぜ」

冬馬・準「ええ（ああ）」

そして俺たちは日が暮れるまで一緒に遊んだ

小雪「楽しかったね」

隼人「そうだな、お前らはクタクタみたいだな」

冬馬「ええ、こんなに外で遊んだのは初めてですからね」

準「なあ、二人とも俺達の友達になってくれねえか？」

隼人・小雪「何言つてんだもう友達だろ（でしょ）」

隼人「俺たちはそう思ってるけどな」

小雪「うん、僕も友達だと思ってるよ」

しばらくしてから

冬馬「ありがとうございます」

準「ありがとう」

それとなんか敬語がなかったから気にしてないが言っておくか

隼人「一応お前らより一つ年上だがよろしくな、あと別に敬語は使わなくてもいいからな」

冬馬「年上でしたか、すいませんいきなりタメ口で話してしまつて」

隼人「まあいいよ、これからは初対面の人にはできるだけ敬語にしないと特に準はな」

冬馬・準「わかりました（わかつた）」

そして二人の友達が増えた。

次の日の朝ニュースで葵紋病院の不正が報道されていた

隼人 s i d e e n d

続く……

三話 無敵超人と小雪に友が増える（後書き）

変なところがあったら申し訳ありません。

次回で小雪の母に無敵超人の技が炸裂！！！！できたらいいなと思っ
てます

四話 無敵超人小雪を救う（前書き）

原作とちがうところもあるかもしれませんがそこは気にしないでください

四話 無敵超人小雪を救う

隼人 side

あれからはよく四人で一緒に遊んでいたが事件は起きた

俺達は冬馬と準とあつた公園で小雪を待っていた

隼人「遅いな小雪……いつもは一番に来て待っているのに…」

冬馬「そうですね、たしかにおかしいですね」

準「みんなで迎えに行くか？」

たしかに今日はなぜか朝から嫌な予感がしていた

隼人「そうだな、迎えに行くか、何か嫌な予感がするし」

冬馬「隼人の嫌な予感は大抵当たってますしね、急いでいきますよ準」

準「何か合ったら大変だしな」

そして俺たちは急いで小雪の家に向かった

そこで見たのは小雪の母が小雪の首を絞めて殺そうとしているところだった

隼人「小雪になにしてんだああああああ」

俺は窓をたたき割って小雪を助けに向かった

隼人 s i d e e n d

小雪 s i d e

僕はいつものようにみんなのところに行こうとした、でもお母さんに止められた

母「小雪？どこに行くのかしら？」

小雪「・・・・・・外に行く・・・・」

僕はそう答えた、でもこんなことになるなんて思ってもなかった。

母「そう、でも、もうあなたの面倒を見るのも飽きたの・・・・・・もう、死んでちょうだい！！！」

そして、お母さんは僕に包丁で切りかかってきた。

ザシュ！！

小雪「あぐう！！・・・痛いよ、お母さん・・・」

僕はかろうじて避けたが腕にかすって血が出ている

母「あなたは知らない子なのよ、だから私があなたを殺すのよ！！！！」

そして痛みで動けない僕の首を絞めてくる

母「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね」

小雪「ぐっ・・・くる・・・し・・・い」

母はそれでもどんどん首を絞めている手に力を入れるづける

隼人「小雪になにしてんだあああああああ」

そして助けが来てくれた、それは、僕に初めの友達になってくれた人だった

僕が見たのはそこまでだった

小雪sideend

隼人side

隼人「小雪になにしってたあああああああ」

そう叫び、俺は小雪を助けるために小雪の母親に突っ込んで行った

隼人「おらあ」

パソコン！！！！

俺は小雪の母親を気絶しない程度に力を抑えてぶん殴った

隼人「小雪！！！！大丈夫か！？」

小雪を見ると外傷はあるが命に別状はないようだ

母「くっ！！！何を・・・邪魔してくれてるのかしら」

そう言い小雪の母親はフラフラしつつも立ち上がる

隼人「何を・・・だと？」

こいつ薬もやっているから何をやっているのかわかってないのか

隼人「お前は人を殺そうとした、それはやってはいけないことと小雪が危なかったから

助けた、それだけだ」

おそらく冬馬と隼もさっきの光景を見ていたから警察にも電話しているだろう

母「その子はいらない子だから殺すのよ、邪魔しないでちょうだい」

隼人「黙れ！！！！小雪をこんなにしておいて、まだそんなことを言うか、もはや救いようが

ない、なら、俺が小雪を殺そうとするなら俺は小雪を守る」

隼人「来るなら来い、次は手加減はせん……」

そして、俺はいつでも攻撃できる態勢を取った

母「子供が大人に勝てるわけないでしょ、いいわ、こうなったらあなたも小雪と

一緒に殺してやるわ」

そして落ちていた包丁を拾い構えて突っ込んでくる

隼人「もう貴様は動くな…」数え抜き手 四！三！二！一！！」

ドス！！ドス！！ドス！！ドス！！！！！！

ちなみに手を気で覆って致命傷にはなっていない、死ぬほどの激痛はある

母「がはっ！！！！」

バコオン！！！！

小雪の母親は数え抜き手の衝撃で壁に叩きつけられて気絶した

冬馬・準「「小雪！！！！大丈夫（か！？）ですか！？」」

冬馬と準が中に入ってきて小雪の近くに来ている

隼人「命に別状はない、気絶しているだけだ」

冬馬「そうですか・・・よかった・・・このことは警察に電話したのもうすぐ

来ると思います、救急車も」

隼人「そうか、とりあえずおそらく包丁で切られたから血が出ているから止血しておいた

方がいいからな」

そう言つて、俺はTシャツの袖を破いて腕の傷の包帯代わりした

それから5分後に警察と救急車が来て事件は終わった、俺は過剰防衛で警察に連れて行かれたが外傷がなく気絶していただけなので小学生ということもあつて、「これからはしないように」と怒られただけで済んだ。

小雪は腕の傷の治療と新しい親を探すために入院した

余談だが親にも小一時間ほど説教されたのは言つまでもない。

隼人 s i d e e n d

そして一週間が経った後、小雪は冬馬の知り合いの養子になることになり名前が榊原 小雪になった。

そして、時は小学校の卒業式になっていた……

続く……

四話 無敵超人小雪を救う（後書き）

今回も変なところがあるかもしれませんが許してください。

次回で世界の旅に出ているんな出会いをしますが飛ばさせてもらいます

申し訳ありません

ちなみにマルギツテは旅の途中に出会ってそこで隼人の本気を見て惚れて告白して隼人もOKを出します、ということにします。

マルギツテとは川神学園で再開するまで出てこないのでもんな流れにしてしまつてすいません。

辰子との出会いをどうしようか考えてないのでこんなのがいいなという希望があつたら教えてください。

五話 無敵超人卒業そして友と別れ旅に…

隼人 side

今日は小学校の卒業式、あの事件の後は以前と同じようにいつも通りに四人で一緒に遊んだりしていた。

隼人「今日でやっと小学校を卒業が二度目となると精神的にしんどいな……」

そして、卒業式は終わり、いつもの四人で集まっている。

冬馬「卒業おめでとうございます」

準「おめでとさん」

小雪「おめでとう」

三人は卒業は祝ってくれた

冬馬「そういえば、中学はどこに行くんですか？」

準「そういえば、聞いてなかったな」

俺はやりたいことがあるからな。

この後のことを三人には伝えておくか。

隼人「俺は中学には行かねえよ、高校に入るまでは世界の道場破り

の旅に行くからな」

旅に出ることを伝えると三人の表情は歓喜から驚愕に変わった

冬馬「どうして、いきなり旅など？」

隼「そうだが、なんで今まで言ってくれなかったんだ？」

小雪「そっだよ」

まあ、そう聞くに決まっているよな

隼人「そりゃ決まってるだろ、びっくりさせたかったんだよ」

隼人「つつても三、四年経ったらここに帰ってくるしな、高校は川神学園に決めてるし、三、四年経てばいつでも会えるさ」

冬馬「確かにそうですが……」

なんか暗い雰囲気になっちまったな

隼人「つつても旅に出るのは来週だからな、それまでは少し時間があるしな」

隼人「一応携帯をもってるしな、それに掛けてくれたらいいさ」

小雪「ねえ、ハヤト、ほんとに行くの？」

隼人「学校を卒業したらずっと行く気だったしな、金だって準備したしな」

金は主に宝くじとか競馬とかでだがな

隼人「まあ今まで黙ってたのは悪かった、これは俺が決めたことだからなお前らに余計な心配をさせた　　くなかったんだよ」

そう言つて俺は三人に頭を下げた

そして

冬馬「わかりました、もう何も言いません、でも絶対に此処に帰つてくると約束してください」

準「そうだが、俺たちはいつも四人でいたんだ、知らない間に一人欠けているなんてシャレにならんか　　らな」

小雪「そうだよ、友達なんだから此処に元気な姿で帰ってくるんだよ、約束だよ」

三人がこんなに思っていてくれるなんてな

隼人「ああ、約束するよ、必ずここに帰ってくるよ」

俺は三人に約束した。

冬馬「では、これでこの話は終わりでこの後はどうしますか？」

小雪「いつも通りあそぼ」

準「そうだな」

隼人「なら、どこで遊ぶか決めるか」

そして俺は旅の出る前日までいつも通り過ごした

～一週間後～

俺は今家族といつもの三人と一緒に空港にいる

碎牙「いいか、必ず帰ってこいよ、帰ってこなかったら勘当だから」

静羽「そつよ必ずよ、約束の期限を過ぎて帰ってきたらお仕置きですからね」

お仕置きは勘弁してほしい……あれはきついからな（遠い目）

冬馬「健康には気を付けてくださいね」

準「寝るときは暖かくして寝ろよ」

お前らは俺の母親か！！

静羽「母親は私よ」

さりげなく心を読まないでほしい

小雪「約束破つたら僕もお仕置きするからね」

隼人「大丈夫だよ、約束は守るよ」

そろそろ飛行機の間か

隼人「じゃあそろそろ行くよ」

そして俺はゲートの方に歩いていく

冬馬・準・小雪「いつてらしゃい!!」

三人の声が聞こえた

ありがたい

隼人「行ってくる!!!!!!」

そして俺は世界の道場破りの旅が始まった

隼人 side end

三人称 side

碎牙「行っただか……」

静羽「行きましたね……」

息子の旅路を嬉しそうにしつつも寂しそうな表情をしている二人

冬馬「さあ、やることが決まりましたね」

準「若？」

小雪「トーマ？」

冬馬「彼は川神学園に入ると言っただけですよ、なら、再び四人一緒になるには川神学園に入らなければ いけないんですから勉強をして川神学園に入学して逆に驚かせてやるんですよ」

準「たしかに驚かせるには十分だな」

小雪「えゝ勉強きらい」

彼らも川神学園に入るのを決意する

そして彼らは再び出会う

三人称 s i d e e n d

続く……

五話 無敵超人卒業そして友と別れ旅に…（後書き）

次回も時間を飛ばします、何度も時間を飛ばして申し訳ないです。
ちなみに、次話は川神学園の2年からスタートします原作の前です
ね。

六話 無敵超人帰ってくるそして入学（前書き）

すいません前回のあとがきに二年からと書きましたが一年からにします

六話 無敵超人帰ってくるそして入学

隼人 side

ついに川神にかえってきた、まあ川神学園の入試があるからなんだがこの三年間の旅はいろいろあった……ちなみに彼女ができました（照）

あの日世界の道場破りの旅に出てしばらく道場破りをしていると裏の組織の連中に目を付けられて勧誘してくるやつもいたが俺を勧誘したことを後悔させるのを兼ねて裏の組織を潰しながら旅をしてやったしかもその後誰も手を出せずに組織を潰されるから「無敵超人」の異名がついた。

その後も世界各地を回って行ったが、紛争地域があったが制圧していたらその制圧任務に当たっていたドイツ軍の中将と会ったが一緒に酒を飲んだら話があって友達になった、その後はしばらくドイツに滞在していたがしばらくしてから「獵犬部隊」の隊長のマルギツテ・エーベルバッハに勝負を挑まれたりしていたが案外楽しかった、そして俺はマルギツテに「夜ここに来なさい」と反強制的呼び出された……

回想……

俺は夜呼び出された場所に来た

隼人「で？エーベルバッハ何か用があるんだろ？」

マルギツテ「あ、ああ……じつは……その……話があるんだ」

隼人（なんか重要だが軍のことじゃないようだな、いつもは凜としているのにたまに

こう今みたいに女の子みたいな感じが出るところもかわいいんだがな）

マルギツテ「その・・・マルギツテと呼んでくれないか？」

隼人「は？別にいいけどよ・・・マルギツテ・・・」

俺はマルギツテの目を見て言った

マルギツテ「はう！！」

マルギツテ（やはりわ、私はこいつにそのこ、恋をしているのか、たぶん間違いないだろう、

中將にも隼人は恋人がいないと聞いたし、ここは覚悟を決めて言っぞ！！！！）

隼人（赤くなったりしていたがなにか決意した目になっているな）

マルギツテ「その・・・私は・・・その・・・お前のことが」

隼人（あれこの展開ってまさか）

マルギツテ「好きなんだ！！！！」

マルギツテ「だから・・・私をお前の彼女にしてくれないか？」

隼人（マジかよ・・・あのマルギツテが俺のことを好きとはな）

俺は告白されて少し呆然としてしまった

隼人（俺もマルギツテのことは結構好きだしな）

隼人「ああ、いいぜ、俺もお前のこと好きだしな、でも俺って結構独占欲が強いから彼女が

増えたりするかもしれないしお前が他の男と仲良くしてたら余計に俺の色に染めたく

なるから大変かもしれないぜ？それでもいいのか？」

そう言うマルギツテは俺の胸に飛び込んできた

マルギツテ「ああ、お前に彼女が増えてもその女と同様に愛してくれればいい、それに私は

お前に以外の男には靡かん」

隼人「ああ、ありがとう、これからよろしくな」

チュッ

そして俺はマルギツテにキスをした……まあその後は予想通りになったと思ってください

ついでに結構ベッドの上でも俺の方が強かった

～朝～

俺の隣ではマルギツテが寝ている、もちろん生まれたままの姿でな

回想終了・・・・・・・・

まあこんな感じで俺に彼女ができた

一年ほどドイツにいたが世界各地を回るのを再開するのをマルギツテに言うつと「最後の夜ですから一緒に寝てください」と言われたので寝たが・・・その日はいつも以上に激しかった・・・次の日は腰が痛かったな。それとフランク（中将のこと）は俺たちが付き合っているのを知っている

そして俺はドイツを出てからはいつも通り紛争を制圧したり裏の組織を潰して回っていた、そして面倒なことにテロ事件が起きたのだ国のお偉いさんが会談しているのを狙ったらしい、見て見ぬ振りもできぬから俺はテロ犯が爆弾で爆破したところに行った額に×印のある子供がいたが怪我をしていた。

回想・・・・・・・・

ドン！！！！

隼人「なんだ？」

近くのビルから爆発音が聞こえた

隼人「テロか・・・逃げ遅れたのがいるかもしれんしな、行くか」

俺はビルの壁を蹴って真上に走り出した

そして俺は火の手が上がっているところに飛び込んだ

隼人「誰かいないのか？」

????「誰だ!!! てめえ!!!!」

いきなり怒鳴られた・・・

隼人「俺は逃げ遅れた人がいないか探しに来たんだ、テロ犯ではない」

????「ほんとか？」

隼人「本当だ」

????「ならいいが、あたいは忍足 あずみ傭兵だ」

隼人「俺は風林寺 隼人裏では無敵超人と言われている」

あずみ「なっ!!!! おまえが有名な無敵超人だと!？」

隼人「ああ、そうだ」

隼人「とにかく逃げ遅れた人を探そうか」

あずみ「あ、ああ」

そして

????「我は九鬼 英雄!!!! 貴様らのように陰からこそこそ人を狙うような下賤な奴らには

容赦せん!!!! 来るなら来い!!!! 我は逃げも隠れもせん!

「！！」

少年の声が聞こえた

あずみ「なんて奴だこの状況であんなことが言えるなんてな、あの人こそあたいの仕える

べき人だ」

隼人「とにかく助けに行くか」

そして少年のいるところに向かった

英雄「誰だ！！貴様らテロリストの一味か！！」

肘を押えているから怪我をしたんだろう

あずみ「私たちはあなたを助けに来ました」

あずみ「そしてあなたこそ私が探していた仕えるべき王」

隼人「とにかくここを出るぞ」

そして俺達は脱出した

ちなみにテロ犯は成敗しておいた

少年は治療のため病院に行った

回想終了……

他にもいろいろあったが取り合えずはこれくらいだ

入試試験管「はい、そこまで、テスト用紙を回収する」

ちなみに試験の途中だ、しかし平均80点はあるから余裕で合格できる

さて、帰るか。

～一か月後～

試験結果発表

もちろん余裕で合格でした、ちなみに一年C組です

それから三人とは再開しましたがどこの高校に行くかは聞いていないがおそらく三人とも同じ高校にいくだろう。

余談だが準がハゲになっていて驚いた

～さらに一か月後～

入学式

ちなみに川神 鉄心の孫の川神 百代を見たが瞬間回復がなければ
B級達人級だった

六話 無敵超人帰ってくるそして入学（後書き）

今回は回想でほとんどです、ちなみにマルギッテとは三年になってから再開します

オリキャラ設定（前書き）

今回は隼人のクラスメイトと先生です

オリキャラ設定

オリキャラ

名前 神崎 悠樹

身長：172cm

体重：59kg

性別：男

所属：川神学園一年C組 原作開始時 三年C組

瞳：黒

髪：黒

髪型：髪が長いので後ろで結ってポニーテールにしている

体型：筋肉はあるが見た目は普通

あだ名：ユウ

一人称：僕

備考

隼人と知り合ったのは入学式の日、席が近かったから話しかけて隼人の旅の話を聞いて気が合ったためよく一緒に行動している。

ちなみに旅の話を知っているのだから隼人が強いのは知っている。

名前 前田 桜

身長 162cm

体重 4……うわ！なにをする、や、やm……本人のOHAN
ASINIで消されました

性別 女

所属 川神学園一年C組 原作開始時 三年C組

瞳 黒

髪 赤

髪型 ぎりぎり肩にかかる程度

体型 一般的だが胸は結構ある

あだ名 サクラ 桜

一人称 私

備考

入学式後、神崎と隼人が一緒にいるのを見て面白そうだから話しかけて

それ以来、学校ではほとんど一緒にいる。

ちなみに隼人が強いのは知らない。

先生

名前 斉藤 トキ

身長：186cm

体重：72kg

性別：男

職業：教師 担当 川神学園一年C組 原作開始時 担当 三年C組

瞳：黒

髪：白

髪型：普通 これといって目立つたところはないため

体型：結構筋肉質だがみんなは気づかないため普通に見える

あだ名： トキ 一人称：先生

備考

主人公たちの担当教師、担当教科は数学。

格闘技を習っていたので見ただけである程度の実力はわかる
しかし、隼人の強さは異常なのはわかるがどれほどなのかはわか

つ
て
い
な
い。

オリキャラ設定（後書き）

今回はオリキャラの設定にしました。
次話は辰子と隼人と出会わせます。

七話 無敵超人学校に入学する。そして勝負する（前書き）

今回はいろいろめちゃくちゃになってます、すいません

七話 無敵超人学校に入学する。そして勝負する

隼人 side

始業式

今日はなんとなく二度寝したかったんだが初日から学校に行かないのはさすがにな

そして、一年C組の指定されている席に座っていると声をかけられた

???「なあ、あんた名前は？」

あ？誰だこいつ？

隼人「名前を聞くんら自分から名乗ってからにしる」

???「あ、悪かったな、僕は「神崎 悠樹」って言うんだ。それで？君の名前は？」

隼人「風林寺 隼人だ」

悠樹「強そうな感じがするんだが聞いたことないな……どこの中学から来たんだ？」

隼人「中学には行ってない、旅に出ていたからな」

悠樹「旅に出ていたのか……なら名前を知らなくて当然だな、それよりその旅の話を」

聞かせてくれないかな？」

隼人「・・・まあ、別にいいだろう」

「説明中」（前回と似たような感じの説明、ちなみに細かいところは省略して彼女が

いるとだけは言った）

隼人「こんな感じだな・・・」

悠樹「すごいな、君とは案外気が合いそうな気がするよ、これから
はユウって呼んでく
れ」

すると教室のドアが開き

「???」「はい、お前ら話をやめろ」

先生らしき人が入ってきた

「???」「先生の名前は「斉藤 トキ」お前らの担任だ、よろしくな
」

トキ「えゝこの後、学長の話があるからグラウンドに出てくれ」

省略します（何かに飢えているかなんとか言っていたが隼人は全
く聞いていない）

「放課後」

トキ「えゝ特に連絡もないしこれで解散、気を付けて帰れよゝ」

そして俺は家に帰ろうとしたとき

???「ちよつと待ってくれんかの？」

学長に呼び止められた

隼人「なんですか？学長？」

学長「いや、実はワシと試合をしてほしいんじゃが」

隼人「俺がですか？」

学長「うむ、これでも最強と言われていたがお主を見て戦ってみた
いと思つてのう」

隼人「まあ、いいですけど、それで？どこでやるんですか？」

学長「うむ、明日川神院に来てくれ」

隼人「わかりました、でも、あなたの孫娘の噂も聞いてますからね
結構な戦闘狂とね、

ですから、明日は変装していきますから」

学長「うむ、まあかまわん、戦ってくれるなら」

隼人「では、明日の放課後に川神院に行きますので」

学長「うむ、ではの」

やっと家に帰れるか、全く夕飯の買い物にも行かなきゃならんのに

（翌日）

放課後

俺は今川神院に向かっている、あの仮面を持って……

そして仮面をつけて川神院に入る

隼人「ここで川神 鉄心と試合をするものだが」

修行僧「え？あ、ああ、では名前を」

隼人「我流Xだ」

そして俺は気を静めて集中する……

そして試合の時が来た

試合を見ている修行僧達もいる

修行僧「東方 川神 鉄心！！」

鉄心「うむ」

修行僧「西方 我流X！！！！！！」

隼人「ああ……」

修行僧「それでは……試合……開始!!!!」

鉄心「顕現の参・毘沙門天!!!!」

いきなり上空に巨大な足が現れる

ズガアアアアン

そのまま足は振り下ろされた

鉄心「……やったか？」

突如後ろから声が聞こえた

隼人「おいしいな・・並みの奴なら今ので終わってるだろうな」

全員「「「「「「「「「「！？」「「「「「「「「「「

鉄心「なら、これでどうだ!!!」

鉄心「九の顯現 天津甕星!!!!」

いきなり巨大な隕石が降ってきた

隼人「なるほどな、これは厄介だな」

隼人「無影無限突き!!!!!!」

俺は隕石を破壊するために光速を超える突きを何度も隕石に叩きこむ

そして隼人の攻撃により鉄心は吹っ飛ぶ

鉄心「グハア!!!!!!」

ドサ……

修行僧「しょ、勝者 我流X!!」

隼人「けっこう強かったな、最後は少し本気を出しちゃったぜ」

そして隼人は川神院を後にする

余談だが川神 百代に勝負を挑まれたが本気で逃げた。

川原

隼人「今日は疲れたな、ここで一眠りしていくか」

隼人は仮面を外して川原に寝そべる

隼人「おやすみ……ZZZZZZZZ」

～三十分後～

隼人「ん？誰がいる？」

俺に膝枕している女がいた

????「ZZZZZZZZZZ」

しかも器用に寝ている

隼人「おい、起きろ」

???「んう？ああ、おはよう」

なんだがのんびりしているやつだな

隼人「とりあえず、下ろしてくれるか？」

???「ああ、ごめんね！すぐ気持ちよさそうに寝ていたから一緒に寝ちゃった」

隼人「まあ、別にいいが、変な奴には気をつけるよ、なにされるかわからんからな」

???「大丈夫だよ！これでも結構強いから」

隼人「まあ、それでも気をつけるよお前みたいな美人に変なことしてくるやつもない

とは限らんからな」

???「うえ！？び、美人？私が？」

隼人「そうだ、お前以外に誰がいるんだよ」

???「そんなこと言われたの初めてだから・・・」

隼人「まあ、とりあえずここに来るなら一応用心しておけよ」

そして俺は立ち上がる

隼人「じゃあな、また縁があれば会おうぜ」

そして俺は家に向かって歩き出した

???「あ・・私は「板垣 辰子」君の名前は？」

隼人「俺の名前は風林寺 隼人だ。じゃあな板垣」

そして俺は家に帰った

隼人 s i d e e n d

辰子 s i d e

私は川原に散歩に来ていた

そして彼に出会った

彼と話していたがどんどん彼のことが知りたくなってきた

なんだか彼のことを考えていると胸の奥が熱くなる

帰ったら亜巳姉に聞いてみよう

ここに来たら彼に会えるのかな？

いつの間にか私の考えていることが彼のことばかりになっていた

家に帰って亜巳姉にこのことを言ったら笑って

亜巳「やっとこの子にも春がきたか」

なんて言っていた、よくわからない

でも、彼のことになってしかたない

また会えるよね？

辰子 s i d e e n d

続く・・・

七話 無敵超人学校に入学する。そして勝負する（後書き）

今回は辰子と主人公を会わせました、こんな感じでいいですか？
次話は時間をとばして二年にします。

アンケート

今回はアンケートを取らせてもらいます

この作品にまじこいSの義経や燕を入れるか？

作者はまじこいSの原作も知らないのでオリジナルになるとおもいます

(ちなみにまじこいSは買っ予定です)

ヒロインの追加です(性格とかわからないのでめちゃくちゃになるかもしれませんが)

1 川神 百代

2 松永 燕

3 武蔵坊 弁慶

4 その他

でアンケートを取ります

もうハーレムでもいいやって思ってますがヒロインは二人だけ増やします

ぜひご協力してください

次話はまだ関係ないので投稿させてもらいます

期限は11月7日の16時まで

期限が短いですがぜひご協力してください。

アンケート（後書き）

感想に百代のヒロイン追加があつたのでアンケートを取らせてもらいました

隼人はたぶんベッドの上でも最強なので3、4人いないと対抗できないと思うので此処はハーレムにしてヒロインの人数を増やして対抗します

八話 無敵超人にサプライズそして治療する

隼人 side

俺が川神学園に入学して一年が経った

鉄心とは戦いの後は飲み仲間で普段から呼び捨てで呼んでいる

???「ねえ、私の話聞してる？隼人？」

こいつは「前田 桜」女だ。

俺とユウが一緒にいるのを見て面白そうだから混ぜて〜と言ってきたからびつくりしたぜ

隼人「すまん、全然聞いてなかった」

桜「もう〜まあいいや、なんか後輩から聞いた話だけど今年の一年はイケメンが多いらしいよ」

隼人「そうなのか・・・てか、男の俺には関係ない話だな」

桜「いや、隼人はなんか知らないのかな？って思って」

こいつは旅に出ていたのと言ってなかったけ？

まあいいか

隼人「知らん、なんでわざわざそんなことを聞かないといけないんだ」

桜「なんか九鬼の人間も来るらしいよ」

隼人「へえ、わざわざこんなところに来るなんてな」

隼人「どうせ明日にはどんな奴が来るかわかるんだしこの話題はもういいだろ」

桜「そうだね」

ユウ「わるい、遅れた」

隼人「やっときたか、さあ帰ろうぜ」

そしていつもの三人で帰ってその日は終わりを告げた

翌日

隼人「ふわあ、眠い……」

俺達は体育館で新入生の入学式にはつきり言ってだるい

ユウ「まったくお前くらいだぜ、あの学長の一喝を聞いて眠そうにしてるの」

桜「たしかにね、てかほんとに今年の一年はかっこいいの多いわね」

二人は鉄心の一喝で目を覚ましている

隼人「別にあんなのへでもないからな」

つか、なげえな

キンクリ！！！！

昼休み

やつと昼休みか

ん？時間が飛んだ？大丈夫だ、問題ない（キリッ）

とりあえず冬馬からのメールで「屋上に来てほしい」と来たから行くか

屋上

ガチャン

俺は屋上の扉を開けた、すると誰かがタツクルする勢いで飛び込んできた

???「わゝハヤトだゝひさしぶり」

隼人「小雪？」

小雪「そうだよ、僕だよ」

隼人「どうなってるんだ？」

冬馬「やはりいきなりで混乱してますね」

「???」「確かにこんなに混乱しているのは初めて見たな」

すると冬馬とハゲが現れた

準「俺の扱いがひどくないか?」

隼人「いつものことだろ」

準「たしかにそうだが・・・」

隼人「で?なんでお前らはここに入学したのか?」

冬馬「ええ、そうですよ」

隼人「別に教えてくれてもよかったんじゃないか?」

冬馬「サプライズですよ、サプライズ」

隼人「俺が旅のことを黙ってたのを根に持ってるのか?」

小雪「全然持つてないよ」ハヤトが驚いた顔が見たかったんだよ」

隼人「そうか、で?何組なんだ?」

冬馬「三人ともS組ですよ」

隼人「俺はC組だから接点がないな」

冬馬「?なぜC組なんですか?あなたなら余裕でS組に入れるでしょう?」

隼人「めんどくさいんだよ、成績は気にしたくないんだよ」

隼人「あと、誰かに目を付けられても面倒だしな」

すると三人ともたしかにねえゝみたいな顔になった

隼人「C組は特に決闘を挑まれることもないしな」

準「本当に面倒くさそうだな」

隼人「それにS組に行っても知り合いもないしな、それなら成績の順位を気に

しない連中と一緒に方がいい」

冬馬「それより隼人あなたは九鬼 英雄を知っていますか?」

隼人「知っているぞ、旅の途中のテロ事件に巻き込まれていたのを助けたな」

冬馬「やはりそうですか・・・彼に会ってほしいんですが」

何かあったのか?

隼人「まあ、別にかまわんぞ」

冬馬「では、明日こちらから連絡するので」

隼人「わかった」

その後は普通に談笑しつつ帰った

ちなみに準がロリコンであることが判明した

翌日の放課後

俺は冬馬のメールで「校門のところで待っていてほしい」と来たので待っている

???「フハハハハハ、我ここに参上!!! 皆の英雄、九鬼 英雄である」

???「さすがです英雄様!!!」

人力車に乗ったどこかで見たことのある二人を見つけた

冬馬「すいません、待たせてしまいましたか？」

隼人「別にそんなに待ってないから気にするな」

英雄「我が友冬馬、お前の言う会わせたい人物はどこだ？」

冬馬「彼ですよ、英雄」

隼人「俺は風林寺 隼人だ」

英雄「ハッ!!! あなたはあの時あずみと共にいた人ではないか!!!」

！」

隼人「まあ、緊急事態だったしな、それであずみはなんでメイドの格好をしているんだ？」

あずみ「私は英雄様の専属のメイドになったんですよ」

隼人「で？冬馬？俺はなにをしたらいんだ？」

冬馬「実は・・・彼の肘を治療できませんか？」

冬馬がそういうと空気が重くなった

英雄「何を言っているんだ、我が友冬馬よどんな名医でも治せなかったんだぞ？」

隼人「なるほどな、それで俺を呼んだのか」

たしかに怪我の後遺症が肘に出ているな

隼人「少し痛い但我慢しろよ」

俺は英雄の後ろの周り首の脊髄を刺激して歪みをなくす

ビシィ！！！！

英雄「ぐわあ！！貴様何をする」

英雄は右腕を思い切り振り俺を振り払う

英雄「なっ!!」

英雄「ぐう!!!」

右腕を押えて座り込む

あずみ「てめえ、英雄様に何しやがった!!!」

英雄「あずみ!!」

あずみ「くっ!!!」

英雄「腕を思い切り振れた・・・」

隼人「ああ、脊髄にほんの少しだけ歪みがあったので刺激してある程度元の状態近づけ

たからだな、これから何度かこれを繰り返していけば治ると思うぞ」

英雄「な、治るのか？また野球ができるのか？」

隼人「野球？とんでもない」

英雄「!!!」

隼人「十二回延長戦まで投げれるようになるよ」

そういつと英雄は涙を流した

隼人「治療の連絡のために連絡先を聞きたいんだが」

あずみ「ならあたいのを覚えておく、あたいに連絡してくれたい
い」

隼人「わかった、じゃあ、あとは任せたぞ冬馬」

そういつて俺はその場を後にした。

続く……

八話 無敵超人にサプライズそして治療する（後書き）

今回は英雄の怪我の治療です。

次話を投稿したらアンケートの結果が出るまでは書き溜めておくのでアンケートよろしくお願いします

アンケート結果発表（前書き）

たくさんのアンケートありがとうございます

アンケート結果発表

アンケートの結果発表です

今回のアンケート

結果は

1	百代	15
2	燕	16
3	弁慶	16
4	その他	揚羽 10 紋白 2 一子 2 由紀江 6 義経 3 小雪 3

という結果になりました、こんなに来るとは作者は正直思っていました

ありがとうございます!!!

ヒロインはマルギッテ、辰子、燕、弁慶、百代でいいですか？

百代は燕と弁慶が同率一位だから取り合えずヒロインに追加ということ

この作品のストーリーはとりあえず弁慶たちは武士道プランで転校してくるがまじこいSのストーリーは入れません

アンケート結果発表（後書き）

作者の勝手に本当に申し訳ないですがヒロインは5人になりました
これからもご愛読ください
できたら次話は明日までに投稿したいです

九話 無敵超人九鬼家に行く・・・そして試合をする

隼人 side

九鬼 英雄の腕を完全に治療したら

あずみ「おい、無敵超人英雄様が治療してくれた礼をしたいから放課後は開けとけよ

そっちに行くからな、じゃあな」

と、携帯にかかってきたのを取ってみれば言うだけ言って切りやがった

さすがの俺も今は呆然とした表情をしているだろう

桜「どうしたの？携帯持ったまま固まって」

隼人「いや、なんでもない用事ができたから今日は一緒には帰れん」

ユウ「まあ、しかたないか」

隼人「悪いな」

そして、放課後

俺は校門の前で待っている

そこに

英雄「フハハハハハハ、我ここに参上！！！！庶民たちよ皆の英雄である九鬼 英雄である！！！！」

あずみ「さすがです英雄様！！！」

あずみと人力車に乗った英雄がきた

隼人「よう」

英雄「むっ！！！！これは隼人殿、肘の治療どうもありがとうございます」

隼人「まあ、俺がテロ事件の時に治療してればこんなことにはなっ
てなかったしな、それどこ

るかこつちのほうが悪いんだから気にするな」

英雄「だが、それでも肘を治療してくれたのは変わりない。だから
お礼をさせてほしいんだが」

あずみ「そうですよ 英雄様がここまで言うてくださってるんです
から（いいからはいつて

言ったらいいんだよ！！）」

あずみよ、お前はいきなり変わりすぎだぞ

英雄「あずみよ、我より目立つな」

あずみ「すいません！！英雄様、お詫びに腕を」

ゴキイ

いきなりあずみが腕の関節を外した

俺はその行動に目を見開いた

隼人「なにやってんだ！！あずみ！！」

あずみ「これが私なりの失態の償いだ」

隼人「いきなりだから腕の関節を外すから心配しただろ、まったく」

英雄「うむ、それはすまなかった、いつも周りでは普通の反応なのでな」

関節外して普通ってS組おかしくないか？

それを聞いて俺は苦笑いした

英雄「とにかく何も礼をしないのは九鬼家の恥、なにかお礼をさせてほしい」

隼人「お礼って言われてもな・・・」

隼人「見返りを求めて治療したわけじゃないしな」

英雄「それでも我は隼人殿に何かお礼をしたいのだ」

お礼ねえ・・・

隼人「じゃあ飯でもおごってくれ」

二人は俺の返答を聞いてキョトンとした表情になっている

英雄「それでいいのか？」

隼人「ああ」

英雄「ならば、我家に来てくれ最高のディナーをごちそうしよう」

隼人「別にごちそうじゃなくてもいいんだが、お言葉に甘えようかな」

英雄「ぜひ、甘えてくれ」

英雄「あずみ！！屋敷に連絡して客人に最高のディナーを用意しろと伝えろ」

あずみ「わかりました英雄様」

そういつて携帯を取り出しどこかに電話を掛ける

英雄「では、行こうか」

隼人「あ、ああ」

なんか緊張しそудな

移動中

九鬼家の屋敷

隼人「でけえ」

俺は九鬼家の屋敷の大きさを見て口を開けて啞然とした表情をしているだろう

英雄「どうしたのだ？隼人殿」

英雄に声を掛けられて正氣に戻る俺

隼人「あ、ああ屋敷の大きさにびっくりしてただけだ」

あずみ「初めて来た人は大体そうなりますよ」

そして俺たちは屋敷の中に入って行っ

たそして豪華なダイナーのある場所に移動する

あれ？なんか額に×印の人が数人いるんですけど、あと執事みたいな人も

隼人「英雄？こちらの方々は？」

英雄「ああ、紹介しよう我の家族だ」

「???」私は「九鬼 帝」息子の腕の治療をしていただき感謝する

たぶん一番偉い人だな

「???」私は「九鬼 局」です。英雄の腕の治療感謝します。」

そらこんな無謀なこというやつはいないからな

英雄「九鬼家従者部隊とか？」

隼人「詳しくは知らんが強い奴はいるんだろ？例えば・・・その紋白さんの専属執事みたいな

金髪とかな」

英雄「気づいていたのか？」

隼人「まあな、揚羽さんもなかなかだがそれを超えている強者の存在がある」

金髪執事「なるほど、なかなか見る目はあるな」

こいつは鉄心とほぼ同等だがここらでは最強クラスだろうな

隼人「それで、戦わせてほしいんだが」

英雄「・・・・・・・・・・」

英雄はどうやら悩んでいるようだな

帝「・・・・いいぞ」

全員「「「「「！？」」「」「」「」

お！許可が出たか

帝「そこまで自信があるなら存分に戦え」

隼人「ありがとうございます」

そして

移動中

戦う場は中庭けっこうな広さがあるが俺にしては少し狭い

隼人「ふう〜」

隼人（集中集中）

隼人「そういえばあなたの名前を聞いてませんでしたね」

金髪執事「・・・ヒューム・ヘルシングだ」

隼人「ヒューム・ヘルシングね・・・たしか鉄心のライバルだとか」

ヒューム「！！鉄心を知っているのか」

隼人「ああ、まあなあいつとも戦ったしな」

隼人（2%で勝てたがな）

こころの中でそう付け加える

ヒューム「なるほど、それほどの実力があれば俺の実力も見抜けるか」

隼人「まあな・・・そろそろ始めるか」

俺はそう言っただけ

ヒューム「そうだな」

ヒュームも構える

揚羽「では、審判は我が務める、双方異議はないか？」

俺達はその言葉に無言で頷く

揚羽「それでは、試合・・・開始！！！！」

それと同時にヒュームは突っ込んできた

俺はそれをわざと当たる

ドゴオ

俺はそのまま5mほど吹っ飛び地面に激突して砂埃が周りに舞う

隼人（たしかに鉄心のライバルだけあるな、だが所詮そこまでか）

俺は砂埃が舞っている中でそんなことを考えてた

あれをやるか
隼人

そして砂埃が風で消えたとき俺はポケットに手をつ突っ込んで立って

いる

ヒューム「・・・なめているのか？」

隼人「これは立派な構えさ・・・いくぜ」

そう言っつて俺は居合拳を放つ

ヒュ・・・バキィ

ヒューム「ぐっ！何が起こった」

ヒュームは居合拳を確認できてないようだ

これはつかえるな
隼人

隼人「まだまだいくぞ」

俺は連続で居合拳を放つ

ヒュヒュヒュヒュ

ヒューム「くっ！！」

ドガガガガ

どうやら少しずつ見え始めているようだ

俺は居合拳でできた隙を見つけて懐に入り込む

隼人「豪殺・居合拳!!」

ヒュオンドゴウン!!!

豪殺・居合拳の直撃を受けたヒュームは吹っ飛ぶ

ヒューム「ああああ」

地面に激突して砂埃が舞う・・・

俺は決まったと思っているが一応警戒は怠らない

ヒュオオオオオン

風が吹いて砂埃が消えた・・・そこには気絶しているヒュームがいた

隼人「ふう～さすがは鉄心のライバルだけはあるな、まさか居合拳を見切られるとはな」

俺は息を吐いた

隼人 side end

観客 side

揚羽「まさかヒュームさんがここまで圧倒されるとは・・・」

揚羽は信じられないといった顔をしている

英雄「冬馬に聞いていたがまさかここまでとはな」

英雄は予想を裏切られて驚愕の表情をしている

紋白「まさかヒュームがここまでやられるとは、あの男面白いのう」

紋白は楽しそうに笑っている

局「まさかここまで強い男がいたとは」

局も驚愕の表情をしている

帝「・・・面白い男だ・・・」

帝はあんまり表情が変わっていない

あずみ「さすがは無敵超人ということか」

あずみは目の前の状況に啞然としてる

老執事「無敵超人ですか・・・彼が」

老執事は納得といった表情をしている

観客side end

隼人side

10%でも出したら誰も付いてはこれないな

隼人「とりあえずヒュームさんを運ぶか」

俺はヒュームを肩に担いで英雄たちのところに移動する

英雄「うお！！！！隼人か・・・びっくりするではないか」

他のみんなもいきなり俺が現れてびっくりしている

隼人「とりあえずヒュームさんは気絶しているだけだ」

俺はヒュームを下ろしてそう言った

英雄「うむ、誰かヒュームを医務室に！！！！」

すると英雄の後ろに執事が現れてヒュームを医務室に運ぶ

俺はいきなり現れた執事に驚いて呆然と見ていた

あずみ「さすがは無敵超人だな」

隼人「・・・どうも」

全員「・・・・無敵超人？」「・・・・」

全員裏の世界の俺を知らないようだ

隼人「俺の異名だよ」

あずみ「無敵超人の異名がついたのは裏の世界の達人を一人残さず半殺しにしたときについ

た異名です」

達人を半殺しと聞いて皆おどろている

揚羽「達人を一人残さず……」

あずみ「ちなみに全員武道四天王クラスの実力者です」

英雄「それを一人で……」

隼人「人数は大体1000人ぐらいだったかな」

1000人の達人を半殺しにできる奴なんて俺以外いないだろ

隼人「それで無敵超人の異名がついたってわけだ」

隼人「とりあえずこれでお暇させてもらいますね」

隼人「ディナーおいしかったです」

隼人 s i d e e n d

続く……

九話 無敵超人九鬼家に行く・・・そして試合をする（後書き）

投稿しました。遅れて申し訳ないです
次回で一応原作に入ろうかと思っています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0241y/>

真剣で最強は恋してる

2011年11月8日02時09分発行